

【宋紀三】起著雍執徐，盡上章敦牂，凡三年。

■宋、●魏、▲燕、統国訳漢文大成．経子史部 第 7 卷 215p

太祖文皇帝上之中元嘉五年（戊辰，428年）

●春，正月，辛未（3日），魏の京兆王の黎は卒す。

■【義康と王弘】荊州刺史、彭城王の義康は、性は聰察（聡明でよく察する）にして、州に在りて職事を修治す。左光祿大夫の范泰は司徒の王弘に謂って曰く：

「天下の事は重く、權要には居り難し。卿の兄弟は盛滿（權要に居る）にして、當に深く降挹（降り退く）を存すべし。彭城王は、帝之次弟にして、宜しく征（征は徴）して還して入朝せしめ、共に朝政に參ぜしむべし。」

弘は其の言を納れる。時に大いに旱し、疾疫あり、弘は上表して咎めを引いて位を遜せんとし、帝は許さず。

西秦【秦の動向】秦の商州（晉の時、張祚は敦煌郡を商州とす。敦煌は河西に属し、熾磐は濬を以て遙かに商州を領して澆河に守らす）刺史の領澆河太守の姚浚は叛して、河西に降り、秦王の熾磐は尚書の焦嵩を以て浚に代わらしめ、騎三千を帥いて之を討たしむ。二月，嵩は吐谷渾の元緒の執る所と為る。（7-216p）

●魏は改元して神䴥とす。（䴥は牝の鹿。時に定州に白鹿を獲たり）

【魏は夏の赫連昌を捕虜とする】

●夏【魏の安定進攻と食糧危機、安頡の進言で夏主を捕虜とする】魏の平北將軍の尉眷は夏主を上邽（甘肅省渭川道天水県、現・天水市秦州区）に攻め、夏主は退いて平涼（甘肅省涇原道平涼県、現・平涼市崆峒区。道教の聖地崆峒山）に屯す。奚斤は安定（現・甘肅省定西市安定区）に進軍し、丘堆と與に、娥清の軍を合わす。斤の馬は疫死多く、士卒は糧に乏しく、乃ち壘を深くして自ら固む。丘堆を遣わして租を民間に督せしめ、士卒は暴掠し、儆備（警備）を設けず。夏主は之を襲い、堆の兵は敗れ、數百騎を以て城に還る。夏主は勝ちに乗り、日々に城下に來たりて鈔掠し、芻牧（草を刈り牛馬を飼養う）するを得ず、諸將は之を患う。監軍侍御史の安頡は曰く、

「詔を受けて賊を滅ぼさんとし、今更に賊の困る所と為り、退いて窮城を守り、若し賊の殺すと為らざれば、當に法に坐して誅せられんとし、進退は皆な生理無し。而るに諸王公（奚斤は宜城王に封ぜられ司空）は晏然として曾て計を為さざる乎？」

斤は曰く、

「今軍士は馬無く、歩を以て騎を撃つは、必ず勝つ理は無く、當に京師の救騎の至るを須ち、之を合い撃たん。」

頡は曰く、

「今猛き寇は外に游逸し、吾が兵は疲れ食盡き、一たび決戦せずんば、則ち死せんこと旦夕に在り、救騎の何をか待つ可き乎！等しく手に死に就くならば、死戦は、亦た可ならず乎！」

斤は又た馬の少なきを以て辭（退）と為す。頡は曰く、

「今諸將の乗る所の馬を斂めば、二百匹を得る可く、頡は敢死之士を募りて出でて之を撃つを請い、就え

敵を破る能わずとも、亦た以て其の鋭を折る可きなり。且つ**赫連昌**は狷^{けん}(心が狭い)にして而して謀^{はかりごと}無く、勇を好んで而して軽々しく、毎に自ら出でて挑戦し、衆は皆な之を識る。若し兵を伏せて掩撃すれば、昌を擒とする可き也。」

斤は猶ほ之を難しとす。**頡**は乃ち陰^{ひそか}に**尉眷**等と謀り、騎を選んで之を待つ。既に而して**夏主**は來たりて城を攻め、**頡**は出でて之に應ず。**夏主**は自ら陳前^{よくせん}に出で搏戦し、軍士は其の貌を識りて、争いて之に赴く。會々^{たまたま}天の大風ふき、塵は揚がり、晝昏く、**夏主**は敗走して、**頡**は之を追い、**夏主**は馬蹶^{つまづ}きて而して墜ち、遂に之を擒とす。**頡**は**同**(安同、永興の初めの八公の一人、安世高の子孫、429年没、慕容垂と親交)の子なり。(続にて補充)

夏 **〔平原王の定の即位〕** 夏の大將軍、領司徒、平原王の**定**(昌の第五子)は其餘の衆數萬を収め、奔(続は奔)りて平涼に還り、**皇帝**に即位し、大赦し、改元して勝光とす。

●**〔赫連昌の優遇〕** **三月**，辛巳(13日)，**赫連昌**は平城に至り、**魏主**は之を西宮の門内に館し、器用は皆な乗輿之副を給して、又た妹の**始平公主**を以て之の妻とす。常忠將軍に假し、爵の會稽公を賜わる。**安頡**を以て建節將軍と為し、爵の西平公を賜わる。**尉眷**を寧北將軍と為し、爵を漁陽公に進める。

●**魏主**は常に**赫連昌**をして左右に侍從せしめ、之と單騎にて共に鹿を逐い、山澗に深く入る。**昌**は素より勇名有り、諸將は以て咸な可からずと為す。**魏主**は曰く、

「天命は在るに有り、亦た何の懼るる所か！」

親しく遇すること初めの如し。

● **〔奚斤は夏主を追撃して捕虜となる〕** **奚斤**は自ら以て元帥^た為るに、而して**昌**は偏裨^{へんひ}(傍らの將軍)の擒とする所と為り、深く之を恥じる。乃ち輜重を捨て、三日糧を繼いで、**夏主**を平涼に追う。**娥清**は水(涇水)に循いて而して往かんと欲し、**斤**は従わず、北道より其の走路^{むか}を邀える(待ち伏せ)。**馬髦嶺**^{ばぼうれい}(甘肅省涇原道固原県、現・寧夏回族自治区固原市原州区)に至り、夏の軍は將に遁げんとし、會々魏の小將の罪有りて亡^にげて夏に歸すあり、(7-217p) **魏軍**の食少なく水無きを以て告ぐ。**夏主**は乃ち兵を分けて**斤**を邀え、前後に之を夾撃し、**魏兵**は大いに潰^{つい}え、**斤**及び**娥清**、**劉拔**(前年奚斤と夏を攻略)は皆な夏の擒する所と為り、士卒は死者六七千人なり。

● **〔丘堆は逃げて、長安を失う〕** **丘堆**は輜重を守り安定に在り、**斤**の敗を聞き、輜重を棄てて長安に奔り、高涼王の**禮**と偕な蒲阪(山西省河東道永濟県、現・運城市永濟市)に奔り、夏人は復た長安を取る。**魏主**は大いに怒り、**安頡**に命じて**丘堆**を斬り、代わりて其の衆を將いて、蒲阪に鎮して以て之を拒ましむ。

夏 ● **夏**，**四月**，**夏主**は遣使して魏に和を請い、**魏主**は詔を以て之を諭し降らむ。

● 壬子(15日)，**魏主**は西巡す。戊午(21日)，河西(君子津の西)に敗す。大赦す。

西秦 **〔乞伏熾磐は卒し暮末は即位〕** **五月**，秦の文昭王の**熾磐**は卒し、太子の**暮末**は即位し、大赦し、改元して永弘とす。

■ **平陸**(県、山東省濟寧道汶上県、現・濟寧市汶上県) 令の河南の**成粲**は復た**王弘**に遜位を勧め、**弘**は之に従い、表を累して陳じて請う。**帝**は已むを得ず、**六月**，庚戌(14日)，**弘**を以て衛將軍、開府儀同三司と為す。

● 甲寅(18日)，**魏主**は長川に如く。

西秦 **〔秦王の暮末の新体制〕** 秦の文昭王を武平陵に葬し、廟號は**太祖**。秦王の**暮末**は右丞相の**元基**を以て侍中、相國、都督中外諸軍、錄尚書事と為し、鎮軍大將軍を以てし、河州(枹罕に治す、都)の**牧謙屯**をして驃騎大將軍と為し、安北將軍、涼州刺史の**段暉**を征して輔國大將軍、御史大夫と為し、叔父の右禁將軍

の千年を鎮北將軍、涼州牧と為して、湟河に鎮しせしめ、征北將軍の木弈干を以て尚書令、車騎大將軍と為し、征南將軍の吉毘を以て尚書僕射、衛大將軍と為す。

西秦 **〔河西王の蒙遜は秦の樂都を伐つ〕** 河西王の蒙遜は秦の喪に因りて、秦の西平を伐つ。西平太守の麴承は之に謂って曰く、

「殿下は若し先ず樂都を取れば、則ち西平は必ず殿下之有と為る。西平は苟くも風を望みて服を請うは、亦た明主之疾む所也。」

蒙遜は乃ち西平を釋^すてて、樂都（甘肅省西寧道碾伯県、現・青海省海東市樂都区）を攻める。相國の元基は騎三千を帥いて（枹罕より）樂都を救い、甫^{はじ}めて入城し、而して河西の兵は至り、其の外城を攻め、之に克つ。其の水道を絶ち、城中は飢え渴し、死する者は太半なり。東羌の乞提は元基が樂都を救うに従いて、陰^{ひそか}に河西と通謀し、繩を下して其の兵を引いて内にいれ、城に登る者は百餘人、鼓噪し門を焼く。元基は左右を帥いて奮撃し、河西の兵は乃ち退く。

西秦 **〔秦は沮渠成都を頼り蒙遜に帰順〕** 初め、文昭王は疾病するや、暮末に謂って曰く、

「吾の死之後は、汝は能く境を保てば則ち善し矣。沮渠成都（119 卷武帝永初三年に秦の捕虜となる）は蒙遜の親重する所と為り、汝は宜しく之に歸すべし。」

是に至り、暮末は遣使して蒙遜に詣り、成都は歸すを許し以て和を求める。蒙遜は兵を引いて還り、遣使して秦に入りて弔祭する。暮末は厚く成都を資送し、將軍の王伐を遣わして之を送らしむ。蒙遜は猶ほ之を疑い、恢武將軍の沮渠奇珍をして捫天嶺に兵を伏せ使め、伐を執りて其の騎士三百人を並（続は并）せて以て歸る。既に而して尚書郎の王杼を遣わして伐を送りて秦に還し、並せて暮末に馬千匹及び錦罽銀繒を遺る。秋，七月，暮末は記室郎中の馬艾を遣わして河西に如きて報聘せしむ。（7-218p）

●魏主は宮に還る。八月，復た廣寧（直隸省口北道涿鹿県の西、河北省張家口市涿鹿県）に如き溫泉（下洛城の東南 40 里に橋山あり、山下に溫泉有り）を觀る。

● **〔柔然の進入〕** 柔然の紇升蓋可汗は其の子を遣わして萬餘騎を將して魏邊を寇さしむ。魏主は廣寧より還り、之を追ひ、及ばず。九月，宮に還る。

●冬，十月，甲辰（10 日），魏主は北巡し。壬子（18 日），牛川（山西省雁門道左雲県、大同市左雲県）に敗す。

西秦 秦の涼州牧の乞伏千年は、酒を嗜み殘虐、政事を恤えず、秦王の暮末は遣使して之を讓め、千年は懼れ、河西（蒙遜）に奔る。暮末は叔父の光祿大夫の沃陵を以て涼州牧と為し、湟河に鎮せしむ。

■ **〔王仲德は魏に侵入〕** 徐州刺史の王仲德は歩騎二千を遣わして魏の濟陽（山東省濟寧道荷澤県、現・荷沢市）、陳留（河南省開封道開封県、現・開封市祥符区）を伐たしむ。

●魏主は宮に還る。

● **〔定州の丁零反す〕** 魏の定州（最初は安州、中山）の丁零の鮮于の台陽は二千餘家を第（続には無し）で叛し、西山（直隸省保定道曲陽県、現・河北省保定市曲陽県）に入り、州郡は討つ能わず。閏月（元嘉曆十一月），魏主は鎮南將軍の叔孫建を遣わして之を討たしむ。

■十一月（元嘉曆十二月），乙未（1 日）朔，日に食之れ有り。

●魏主は西河（続は河西、オルドス）に如きて校獵す。十二月（元嘉曆一月），甲申（21 日），宮に還る。

北涼 河西王の蒙遜は秦を伐ち、磐夷（甘肅省西寧道西寧県、現・青海省西寧市）に至り、秦の相國の元基等は騎萬五千を將して之を拒む。蒙遜は還りて西平を攻め、征虜將軍の出連輔政等は騎二千を將して之を救う。

■ **〔謝靈運の奔放〕** 秘書監の謝靈運は、自ら以えらく名輩才能は、應に時政に參ずべしと。上は唯だ接す

るに文義を以てし、宴に侍する毎に談賞して而して已む。王曇首、王華、殷景仁の名位は素より靈運の下に出でるも、並びて任遇せ見るに、靈運の意は甚だ不平なり、多く疾と稱して朝直（入朝）せず。或いは郭を出でて遊行し、且に二百里、旬を経ても歸らず、既に表聞する無く、又た急を請わず。上は大臣の意を傷つくを欲せず、諷（遠回しに言う）して自ら解か令む。靈運は乃ち上表して疾と陳じ、上は假を賜わり、會稽に還ら令む。而して靈運は游飲自若し、法司の糾する所と為り、坐して免官す。

■是の歳、師子（錫蘭島、南史に天竺の傍国、その地は冬夏無く、五穀はよく育つ）王の刹利摩訶及び天竺の迦毘黎（天竺国名）王の月愛、皆な遣使して奉表して入貢し、表辭は皆な浮屠之言の如し。

●魏の鎮遠將軍の平舒侯の燕鳳（拓跋四世に仕える）は卒す。（2021-0712）

太祖文皇帝上之中元嘉六年（己巳，429年）

【文帝の劉義康への戒め】

■ 「義康の重用」 春，正月（元嘉曆二月），王弘は上表して州、録（揚州刺史・録尚書事）を解き、以て彭城王の義康に授かんと乞い、帝は優詔して許さず。癸丑（20日），義康を以て侍中、都督揚、南徐（京口の僞州群）、衞三州諸軍事、司徒、録尚書事、領南徐州刺史と為す。（7-219p）弘は義康と二府並（続は並）んで佐（参佐）を置き兵を領し、共に朝政を輔く。弘は既に多く疾あり、且つ大權を委遠（棄て遠ざかる）せんと欲し、事ある毎に義康を推讓し、是に由り義康は専ら内外之務を總べる。

■ 「義康への戒め文」 又た撫將軍の江夏王の義恭を以て都督荆、湘等八州諸軍事、荊州刺史と為し、待中の劉湛を以て南蠻校尉と為し、府州の事を行なわしむ。帝は義恭に書を與えて、之を誡めて曰く、「天下は艱難にして、家國の事は重く、守成と曰うと雖も、實に亦た易からず。隆替（栄え替わる）安危は、吾が曹（部屋、軍曹）に在る耳、豈に王業を感じ尋ね（王業の艱難を感念し治を為す理を尋ねず）、大いに負荷（傳に「其の父は薪を析きたるに、其の子負荷する能わず」、父祖の偉業を継承）を懼れざる可けんや！汝は性は偏急にして、志之（とどこお）る所は、其の必ず行なわんと欲し、意の存せざる所は、物に従いて回り改む。此れ最も弊（良くない）事なり、宜しく抑え裁くを念ずべし。衛青は士大夫に遇えば禮を以てし、小人に與するに恩有り。西門（西門豹、性剛急、常に韋を佩き自ら緩める）、安於（続は于、董安于是性寛緩、常に弦を佩き自ら警す）は、性を矯めて美を齊しくす。關羽、張飛（69 卷魏文帝黃初二年）は、偏に任じて弊を同じくす。己を行い事を擧げるに、深く宜しく此を鑒（鑑）みるべし！若し事今日に異なり、嗣子は幼く蒙（物知らずで道理がわからない）にして、司徒周公（周建国の功臣）之事には當たれば、汝は祇（慎む、敬う）順之理を盡さざる可からず。爾の時天下の安危は、汝二人と決する耳。」

■ 「月に三十万以上使うな」 「汝は一月に自ら錢を用いること三十萬を過ぎる可からず、若し能く此を省けば、益々美となる。西楚（江左、荊州の事）の府捨（続は舍）は、略諳（諳んじる）究する所なり、計るに當に改作を須め、日々に新異を求めざるべし。凡そ獄を訊（問）ねるは多く時に当たりて決し、逆慮（あらかじめ考慮する）す可きこと難く、此くは實に難しと為す。訊日に至りて、懷を虚しくして博く盡し、慎みて喜怒を以て人に加える無かれ。能く善き者を擇んで而して之に従えば、美は自ら己に歸さん。意を専らにして自ら決し、以て獨斷之明を矜る可からざる也！名器は深く宜しく慎み惜しみ、妄りに以て人に假す可からず。暉近の爵賜は、尤も應に裁量すべし。吾は左右に於いて恩少なしと為すと雖も、聞くが如く外論は以て非と為さざる也。貴を以て物を凌げば、物は服せず。威を以て人に加えれば、人は厭かず。此くは達し易き事耳。」

■ **「遊びすぎるな」**「聲樂嬉游は、宜しく過ぎ令むべからず。蒲（チョボ、博打）酒漁獵は、一切為す勿かれ。供用して身に奉ずるは、皆な節度有り、奇服異器は、宜しく興長すべからず。又た宜しく數々佐吏（佐史は間違い）を引見すべし。相い見て數々せざれば、則ち彼我は親まず。親まざれば、人情を盡くすを得るに因無し。人情を盡くさざれば、復た何に由りてか衆事を知らん也！」

夏 夏の酒泉公の俊は平涼より魏に奔る。

● 丁零の鮮于の台陽等は魏に降を請い、魏主は之を赦す（去年の反乱で西山に入るを許す）。

西秦 秦の出連輔政等は未だ西平に至らず、河西王の蒙遜は西平（前年包圍）を抜き、太守の麴承を執る。（7-220p）

西秦 二月（元嘉曆二月閏月）、秦王の暮末は妃の梁氏を立てて王后と為し、子の萬載を太子と為す。

■ 三月、丁巳（15日）、丘の子の劭を立てて太子と為す。戊午（26日）、大赦す。

■ 辛酉（29日）、左衛將軍の殷景仁を以て中領軍と為す。帝は章太后（章太后の胡氏は帝を生み五年、讒せられ死を賜る）の早く亡くなるを以て、太后の生む所の蘇氏を奉じるを甚だ謹む。蘇氏は卒し、帝は往きて哭に臨み、封爵を追加せんと欲し、群臣をして之を議せ使む。景仁は以て為す、
「古典の之無し」

乃ち止む。

西秦 初め、秦の尚書の隴西の辛進は文昭王に従いて陵霄觀に遊び、飛鳥を彈ち、誤って秦王の暮末之母に中たり、其の面を傷つく。暮末の即位に及び、母の面を傷つく之由を問ひ、母は狀を以て告ぐ。暮末は怒り、進を殺し、其の五族二十七人を並（續は并）す。

■ 夏、四月、癸亥（2日）、尚書の左射の王敬弘を以て尚書令と為し、臨川王の義慶を左僕射と為し、吏部尚書の濟陽の江夷を右僕射と為す。

● **「魏の国書の編纂は崔浩らに命ず」** 初め、魏の太祖は尚書郎の鄧淵に命じて《國記》十餘卷を撰じしめ、未だ成さず而して止む。世祖は更に崔浩と中書侍郎の鄧穎等とに命じて續きて之を成さしめ、《國書》三十卷を為す。穎は、淵之子也。

【北魏の柔然徹底討伐、極めず】

● **「柔然戦の是非の論議」** 魏主は將に柔然を撃たんとし、兵を南郊に治め、先ず天を祭り、然る後に行陳を部勒す。内外の群臣は皆な行くを欲せず、保太后は固く之を止め、獨り崔浩のみ之を勸む。

尚書令の劉絜等は共に太史令の張淵、徐辯を推し魏主に言ひて曰わ使む、

「今茲は己巳、三陰（干も陰、支も陰でこの年に当たるから三陰）之歲なり、歲星は月を襲ひ、太白は西方に在り、兵を擧ぐ可からず、北伐は必ず敗れる。克つと雖も、上には不利なり。」

群臣は因りて之に共に贊して曰く、

「淵等は少き時嘗て苻堅の南伐を諫め、堅は從わず而して敗れ、言う所中たらざる無く、違ふ可からず也。」

魏主の意は快からず、詔して浩と淵等に前に於いて論難せしむ。

● 浩は淵を詰りて、辯じて曰く、

「陽は德と為り、陰は刑と為る、故に日食すれば德を修め、月食すれば刑を修める。夫れ王者が刑を用いるや、小なるは則ち諸々市朝に肆（つら晒す）ね、大なるは則ち諸を原野に陳ず（たが甲兵を用いる）。今出兵して以て

罪有るを討つは、乃ち刑を修める所以也。臣は天文を竊^{ぬすむ}み觀るに、比年以來、月行は昴を掩い、今に至りて猶ほ然り。其の占いは、三年天子は大いに旄頭（昴を旄頭と為す、胡星なり）之國を破ると。蠕蠕、高車は、旄頭の衆也。願はくは陛下は疑う勿かれ。」

淵、辯は復た曰く、

「蠕蠕は、荒外の無用之物なり、其の地を得ても耕して而して食う可からず、其の民を得るとも而して臣として使う可からず、輕疾にして常無く、而して得ても制し難し。何の汲汲として、而して土馬を勞して以て之を伐つ有らんや？」

浩は曰く、

「淵、辯の天道を言うは、猶ほ是れ其の職なり、人事の形勢に至りては、尤も其の知る所に非らず。(7-221p) 此れ乃ち漢世（漢安国・主父偃より嚴尤に至るまでその論は皆かくの如し）は常談なり、之を今施すは、殊に事宜に合わず。何と則ち蠕蠕は本は國家の北邊之臣にして、中間に叛きて去る。今其の元の惡を誅し、其の良民を収め、舊役に復せ令むは、無用に非らざる也。世人は皆な謂う淵、辯は數術を通解し、成敗を明決すと、臣は之を試問するを請う。屬^{さきに}者統萬（夏の首都）の未だ亡^{ほろ}びざるの前に、敗微有りや無しや？若し其の知らざれば、是れ術無き也。知りて而して言わざれば、是れ忠ならず也。」

時に赫連昌は坐に在り、淵等は自ら未だ嘗て言有らずを以て、慚^はじて對う能わず。魏主は大いに悦ぶ。

●既に罷^やめ、公卿の或いは浩を尤めて曰く、

「今南寇（宋）は方に國の隙を伺い、而して之を捨てて北伐せんとす。若し蠕蠕が遠く遁げれば、前に獲る所無し、後に強寇有り、將に何を以て之を待つや？」

浩は曰く、

「然らず。今先ず蠕蠕を破らずして、則ち以て南寇を待つ無し。南人は國家の統萬に克つを聞いて以來、内は恐懼^{いだ}を懷き、故に聲を揚げて衆を動かし以て淮北を衛る。吾が蠕蠕を破る^{ころ}比あい、往還之間は、南寇は必らず動かざる也。且つ彼は歩にして我は騎なり、彼が能く北來すれば、我は亦た南に往くべし。彼の甚だ困るに在りて、我に於いては未だ勞せず。況んや南北は（風）俗は殊なり、水陸の宜しきは異なり、設^{たと}使國家は之に河南を與えるとも、彼は亦た能く守らざる也。何を以て之を言うや？劉裕之雄傑を以てし、關中を吞併し、其の愛子を留め、良將を以て輔^{たす}け、精兵は數萬にしても、猶ほ能く守らず。全軍は覆没し（118 卷安帝義熙 14 年）、號哭之聲は、今に至るまで未だ已まず。況んや義隆の今日の君臣は裕の時之比に非らず！主上は英武にして、土馬は精強、彼が若し果たして來たらば、譬^{たと}えば駒犢^{くとう}（子牛）を以て虎狼に斗^{たたかわ}（鬪）わすが如き也、何の懼れか之れ有りや！蠕蠕は其の絶遠を恃んで、謂えらく國家の力は制する能わず、自ら寛^{くつろ}いで日久しく、故に夏は則ち衆を散らして放畜し、秋は肥えて乃ち聚まり、寒に背きて溫に向かい、南に來たりて寇鈔す。今其の不備を掩えば、必ず塵を望みて駭き散ず。牡馬は牝を護り、牝馬は駒を戀い、驅馳して制し難きも、水草を得ざれば、數日に過ぎずして、必ず聚^{あつ}まり而して困弊し、一舉に而して滅す可き也。暫^{しば}く勞し永く逸せん、時は失う可からず、患いは上の此の意無きに在り。今上の意は已に決し、奈何して之を止めるや！」

寇謙之は浩に謂って曰く、

「蠕蠕には果たして克つ可き乎？」

浩は曰く、

「必ず克たん。但だ諸將の瑣瑣^{ささ}（細小なる貌）、前後は顧慮し、勝ちに乗りて深入りする能わずして、全舉せざら使むを恐る耳。」

■是より先、帝は魏の使者の還るに因りて、魏主に告げて曰く、

「汝は趣^{すみやか}に我に河南の地を歸せ！然らずんば、將に我が將士之力を盡くさんとすなり。」

●魏主は方に柔然を伐つを議し、之を聞きて大いに笑い、公卿に謂って曰く、

「龜鰲^{きべつ}（スッポン、中国東南は澤の国なので、こう表現）は小豎しく、自ら救うに暇あらず、夫れ何の能く為すや！就使能く來たらば、若し先に蠕蠕を滅せざれば、乃ち是れ坐して寇の至るを待ち、腹背に敵を受けるは、良策には非らざる也。吾は行くを決す矣。」（7-222p）

●〔北魏の柔然討伐出発〕庚寅（29日）、魏主は平城を發し、北平王の長孫嵩、廣陵公の樓伏連をして居守せ使む。魏主は東道より黒山（綏遠特別区域四子部落旗）に向かい、平陽王の長孫翰をして西道より大娥山に向かわしめ、同じく柔然之庭（王庭）に會す。

■五月、壬辰（1日）朔、日に之れ食有り。

■王敬弘は固く尚書令を譲り、表して東に還るを求める。癸巳（2日）、更に敬弘を以て侍中、特進、左光祿大夫と為し、其の東歸（建康より会稽に歸る事）を聽^{ゆる}す。

●丁未（16日）、魏主は漠南に至り、輜重を捨て、輕騎兼馬（乗り換え馬、副馬）を帥いて柔然を襲撃し、栗水（漠北、稽落山の近く、外蒙古モンゴル）に至り、柔然の紇升蓋可汗は先に備えを設けず、民畜は野に滿ち、驚怖して散り去り、相い攝を収める莫し。紇升蓋は廬舎を焼き、跡を絶って西走し、之く所を知る莫し。其の弟の匹黎は先に東部の主にして、魏寇有るを聞き、衆を帥いて其の兄に就かんと欲す。長孫翰に遇い、翰は邀え撃ちて、大いに之を破り、其の大人數百を殺す。

夏〔夏、河西也大混乱〕夏主は復た統萬を取らんと欲し、兵を引いて侯尼城（甘肅省涇原道平涼県の東、現・平涼市崆峒区）に至り、敢えて進まず而して還る。

北涼 西秦〔北涼・西秦の攻防〕河西王の蒙遜は秦を伐ち、秦王の暮末は相國の元基を留めて枹罕（現・甘肅省臨夏回族自治州臨夏市）を守らしめ、遷りて定連（甘肅省蘭山道導河県、現・臨夏回族自治州臨夏市）を保つ。

北涼 西秦南安太守の翟承伯等は罕干谷（甘肅省西寧道西寧県）に據りて以て河西に應じ、暮末は之を撃破し、進みて治城（甘肅省蘭山道導河県、現・臨夏回族自治州臨夏市）に至る。

北涼 西秦西安太守の莫者幼眷^{けんせん}は汧川（甘肅省西寧道西寧県、現・西寧市）に據りて以て叛し、暮末は之を討ち、幼眷の敗れる所と為り、定連に還る。

北涼 西秦蒙遜は枹罕に至り、世子の興國を遣わして定連に進攻す。六月、暮末は逆に興國を治城に撃ち、之を擒とし、蒙遜を追撃して譚郊（現・甘肅省臨夏回族自治州積石山県）に至る。

北涼 西秦吐谷渾吐谷渾王の慕瑰は其の弟の沒利延を遣わして、騎五千を將して蒙遜に會して秦を伐たしめ、暮末は輔國大將軍の段暉等を遣わして邀撃し、大いに之を破る。

●〔魏の柔然襲撃の成功、四散する〕柔然の紇升蓋可汗は既に走り、部落は四散し、山谷^{さんぶく}に竄伏し、雜畜は野に布^とき、人を収視する無し。魏主は栗水に循いて西行し、菟園水（燕前山、外蒙古賽音諾顔部の杭愛山の南、平城より3700里、現・モンゴル）に至り、軍を分けて搜討し、東西五千里、南北三千里、俘斬は甚だ衆し。高車の諸部は魏兵の勢いに乗じて、柔然を鈔掠す。柔然の種類の前後の魏に降る者は三十餘萬落、戎馬を獲ること百餘萬匹、畜産、車廬^{びまん}は、山澤に瀾漫（一面に広がる）し、亡慮^{ぼうりよ}（大凡）は數百萬。

●〔柔然に逃げられ、あと二日足らず〕魏主は弱水に循いて西行し、涿邪山に至り、諸將は深入して伏兵有るを慮り、魏主に留め止まるを勧め、寇謙之は崔浩之言を以て魏主に告げ、魏主は従わず。秋、七月、

兵を引いて東に還る。黒山に至り、獲る所を以て班じて將士に賜るに差有り。既に而して降人の言を得る、

「可汗は先に病を被り、魏兵の至るを聞き、為す所を知らず、乃ち穹廬（天幕）を焚き、(7-223p) 車を以て自ら載せ、數百人を將いて南山に入る。民畜は窘（困る）聚し、方六十里（続により補充）は人の統領する無く、相い去る百八十里、兵を追いて至らず、乃ち徐ろに西に遁げ、唯だ此に免るるを得る。」

後に涼州の賈胡（胡の商人、ソグド人らか）の言を聞くに、

「若し復た前^{すす}み行くこと二日にして、則ち盡く之を滅^{ほろぼ}ししならん矣。」

魏主は深く之を悔やむ。紇升蓋可汗は憤悒して而して卒し、子の吳提は立ち、敕連（神聖の意）可汗と號す。

■ 〔楊玄死して、楊保宗を廢して楊難當立つ〕 武都の孝昭王の楊玄は疾病し、國を以て其の弟の難當に授けんと欲す。難當は固辭し、玄の子の保宗を立てて而して之を輔けんと請う。玄は之を許す。玄は卒し、保宗立つ。難當の妻の姚氏は難當の自立を勧め、難當は乃ち保宗を廢し、自ら都督雍、涼、秦三州諸軍事、征西大將軍、開府儀同三司、秦州刺史、武都王と稱す。

北涼 西秦 〔蒙遜は興國を秦に贖えず〕 河西王の蒙遜は遣使して穀三十萬斛を送り以て世子の興國を秦に贖わんとし、秦王の暮末は許さず。蒙遜は乃ち興國の母の弟の菩提（仏書に由る名前）を立てて世子と為す。暮末は興國を以て散騎常侍と為し、其の妹の平昌公主を以て之に妻とす。

● 〔バイカル湖まで遠征か〕 **八月**、魏主は漠南に至り、高車の東部の已尼陂（北史に烏洛侯国は嫩江の流域に據須し北部は黒竜江に及びその西北二十日の行程に于己尼大水あり、北海と謂うはバイカル湖と想像できる）に屯するは、人畜は甚だ衆にして、魏軍を去ること千餘里と聞き、左僕射の安原等を遣わして萬騎を將して之を撃たしむ。高車諸部の迎え降する者數十萬落、馬牛羊百餘萬を獲る。

● **冬、十月**、魏主は平城に還る。柔然、高車の降り附く之民を漠南に徙し、東は濡源に至り、西は五原の陰山に暨（及）び、三千里の中、之をして耕牧せ使め而して其の貢賦を収める。長孫翰、劉縉、安原及び侍中の代人の古弼に命じて同じく之を鎮撫せしむ。是より魏之民間の馬牛羊及び氈皮は之が為に價（^{あた}い）賤し。

● 〔魏主は崔浩を重用〕 魏主は崔浩に侍中、特進、撫軍大將軍を加え、以て其の謀畫之功を賞す。浩は善く天文を占い、常に銅鋌を酢（醋）器の中に置き、夜は見る所有れば、即ち鋌を以て紙に畫して字を作り以て其の異を記す。魏主は毎に浩の家^{つね}に如き、問うに災異を以てし、或いは倉猝にして束帶に及ばず。疏食を奉進し、精美なるに暇あらず、魏主は必ず之が為に箸を舉げ、或いは立ちて嘗めて而して還る。魏主は嘗て浩を引いて臥内に出入せしめ、從容として浩に謂って曰く、

「卿の才智は淵博にして、朕が祖考に事え、忠を三世（道武帝・明元帝・大武帝）に著わす、故に朕は卿を引いて以て自ら近づく。卿は宜しく忠を盡くして規諫すべし、隱す所有る勿かれ。朕は或いは時に忿恚^{ふんい}し、卿の言に従わずと雖も、然るに終に久しく卿の言を深く思う也。」

嘗て浩を指さして以て新降の高車の渠帥に示して曰く、

「汝の曹^{ともがら}は此人を視るに尪^{わん}（弱い）纖懦弱にして、弓を彎き矛を持つ能わず、然れども其の胸中の懷く所は、乃ち兵甲に過ぎる。朕は征伐之志有ると雖も而して自ら決する能わず、前後の功有るは、皆な此の人の教える所也。」

又た尚書に敕して曰く、

「凡そ軍國大計は、汝が曹の決する能わざる所の者は、皆な當に浩に咨り、然る後に施行せよ。」(7-224p)

西秦**[暮末と軻殊羅の確執]**秦王の暮末之弟の軻殊羅は文昭王の左夫人の秃髮氏に烝（目上・身分の高い女性と姦通する）し、暮末は知りて而して之を禁ず。軻殊羅は懼れ、叔父の什寅と暮末を殺し、沮渠興國を奉じて以て河西に奔らんと謀る。秃髮氏をして門鑰（鍵）を盗ま使め、鑰は誤ち、門者は以て暮末に告げる。暮末は悉く其の黨を収めて之を殺し、而して軻殊羅を赦す。什寅を執り、之を鞭ち、什寅は曰く、「我は汝が死を負うも、汝の鞭に負わず！」

暮末は怒り、其の腹を剝りて、屍（続は尸）を河に投げる。

夏**[夏主は統萬城を望んで泣く]**夏主は少きときは凶暴無頼にして、世祖の知る所と為らず。是の月、陰槃（陝西省關中道長武県、現・咸陽市長武県）に攻し、苛藍山（甘肅省涇原道平涼県の東、現・平涼市崆峒区）に登り、統萬城を望んで泣いて曰く、

「先帝が若し朕を以て大業を承けしめば、豈に今日之事有らん乎！」

■**十一月**，己丑（1日）朔，日に之食有り，鉤の如く盡きず，星は晝に見え，晡に至りて方に没し，河北の地は暗し。

●魏主は西巡し，柞山に至る。

■**十二月**，河西王の蒙遜、吐谷渾王の慕琬は皆な遣使して入貢す。

●是の歳，魏の内都大官の中山の文懿公の李先（燕より魏に降るは108巻孝武帝太元21年にあり）、青冀二州刺史の安同は皆な卒す。先は年九十五なり。

西秦秦は地震い，野草は皆な自ら反す。

太祖文皇帝上之中元嘉七年（庚午，430年）

■**春，正月**，癸巳（6日），吐谷渾王の慕琬を以て征西將軍，沙州刺史、隴西公と為す。

●庚子（13日），魏主は宮に還る。壬寅（15日），大赦す。癸卯（16日），復た廣寧に如き，溫泉に臨む。

●**二月**，丁卯（11日），魏の平陽威王の長孫翰は卒す。

●戊辰（12日），魏主は宮に還る。

■**[宋の河南回復作戦発動]**帝は位を踐みてより以來，河南を恢復する之志有り。**三月**，戊子（2日）詔して甲卒五萬を簡びて右將軍の到彦之に給し，安北將軍の王仲德、袁州刺史の竺靈秀を統べて舟師は河に入らしめ，又た驍騎將軍の段宏をして精騎八千を將して直ちに虎牢を指さ使め，豫州刺史の劉德武をして兵一萬を將して繼いで進ましめ，後將軍の長沙王の義欣をして兵三萬を將して征討諸軍事を監せしむ。義欣は，道憐（武帝の弟）之子也。

●**[宋の使者に魏主は怒り、冬進撃を決意]**先ず殿中將軍の田奇を遣わして魏に使いし，魏主に告げて曰はしむ、

「河南（魏が河南を取るは119巻滎陽王景平元年にあり）は舊是れ宋土なり，中ごろ彼の侵す所と為り，今當に舊境を修復し，河北に關せず。」

魏主は大いに怒りて曰く、

「我が生まれて發（続は髮）未だ燥かざるに，已に河南は是れ我が地と聞く。此れ豈に得る可けんや！必ず若し進軍せば，今は當に權に戍を斂め相い避け，冬寒く地は淨く，河冰は堅く合うを須ち，自ら更に之を

取らん。」

■甲午（8日）、前南廣平（江左、廣平郡を襄陽に僑置す。宋は朝陽県の境を実土と為し、雍州に属さず）太守の尹冲を以て司州刺史と為す。長沙王の義欣をして出でて彭城に鎮し、衆軍の聲援と為さしむ。（7-225p）游撃將軍の胡藩を以て廣陵に戍し、府州の事を行わしむ。

●壬寅（16日）、魏は赫連昌を封じて秦王と為す。

●〔敕勒の千餘家の反乱〕魏は新たに敕勒（チュルク、トルコ系）の千餘家の徙る有り、將吏の侵漁に苦しみ、怨言を出し、期するに草生え牛馬の肥えるを以て、亡げて漠北に歸らんとす。尚書令の劉縉、左僕射の安原は奏して、

「河氷の未だ解けざるに及び、之を河西に徙すを請う。春に向かい氷は解け、北に遁げるを得ざら使む。」

魏主は曰く、

「此の曹^{ともがら}の習俗は、放散して日久しく、譬えば囿中之鹿の如く、急なるときは則ち奔突し、之を緩めば自ら定まる。吾が區處は自ら道有り、徙すを煩わさざる也。」

縉等は固く請うて已まず、乃ち聽^{ゆる}して三萬餘落を河西に分けて徙すこと、西して白鹽池（五原郡に白鹽池、黒鹽池あり、内蒙古オルドス部）に至る。敕勒は皆な驚駭して、曰く、

「我を河西に圜すは、我を殺さんと欲す也！」

西に涼州に奔らんと謀る。劉縉は五原の河北に屯し、安原は悅拔城（オルドス）に屯して以て之に備える。

癸卯（17日）、敕勒の數千騎は叛し、北に走り、縉は追いて之を討つ。走る者は食無く、相い枕して而して死す。

●〔南宋の北伐に対して、先手南進の議論〕魏の南邊の諸將は表して稱す、

「宋人は大嚴し、將に入寇せんとす。兵三萬を請い、先ず其の未だ發せざるに、逆に之を撃ち、以て其の銳氣を挫くに足り、敢えて深く入らざら使めん。」

因りて悉く河北の流民の境の上に在る者を誅し、以て其の郷導を絶たんと請う。魏主は公卿をして之を議さしめ、皆な當然と為すを以てす。崔浩は曰く、

「可からず。南方は下濕（濕）なり、夏に入りて之後、水潦は方に降り、草木は蒙密し、地氣は鬱蒸し、疾癘を生じ易く、師を行かす可からず。且つ彼は既に嚴しく備え、則ち城を守りて必ず固からん、留まりて屯して久しく攻めれば、則ち糧運は繼がず。軍を分けて四掠すれば、則ち衆力は單寡にして、以て敵に應ずる無かれ。今を以て之を撃つは、未だ其の利は見えず。彼が若し果たして能く北に來たれば、宜しく其の勞れ倦み、秋涼しく馬は肥えるを待てば、敵に因りて食を取り、徐^{おもむ}ろに往きて之を撃てば、此くは萬全之計也。朝廷の群臣及び西北の守將は、陛下の征伐に従い、西は赫連を平らげ、北は蠕蠕を破り、多く美女、珍寶を獲り、牛馬の群れと成る。南邊の諸將は聞き而して之を慕い、亦た南鈔して以て資財を取り、皆な私計を營まんと欲し、國の為に事を生ぜんとす、従う可からず也。」

魏主は乃ち止む。

●〔崔浩は天文を分析して過度の防衛を諫めるも聞かず〕諸將は復た表す、

「南寇は已に至り、部する所の兵は少なく、幽州以南の勁兵を簡^{えら}びて己を助けて戍守せしめ、乃び漳水に就きて船を造り嚴備して以て之を拒まんを乞う。」

公卿は皆な以て為す

「宜しく請う所の如くすべし、並びに**司馬楚之**、**魯軌**、**延之**等を署して將帥と為し、南人を招き誘わめん。」

浩は曰く、

「長策に非らざる也。**楚之**等は皆な彼の畏忌する所なり、今國家は悉く幽州以南の精兵を發して、大いに舟艦を造り、隨いて輕騎を以てすと聞けば、國家は**司馬氏**を存立して、**劉宗**を誅して除かんと欲すと謂い、(7-226p) 必ず國を擧げて震駭し、滅亡を懼れ、當に悉く精銳を發し、心を並せて力を竭し、死を以て之を争うべし、則ち我が南邊の諸將は以て之を御(續は禦)ぐ無し。今公卿は威力を以て敵を卻(續は却)けんと欲し、乃ち之を速める所以也。虚聲を張りて而して實害を召くとは、此くは之れ謂う矣。故に**楚之**之徒は、往くときは則ち彼れ來たり、止まるときは則ち彼は息まり、其の勢いは然る也。且つ**楚之**等は皆な纖利の小才にして、止だ能く輕薄無賴を招合し而して大功を成す能わず、徒らに國家をして兵は連なり禍いを結ば使め而して已む。昔**魯軌**は**姚興**に説いて以て荊州を取らんとし、至るときは則ち敗散し、蠻人に掠賣せられて奴と為り、終に禍いは**姚泓**に及び、此くは已然之效也。」

魏主は未だ以て然りと為さず。**浩**は乃ち復た天の時を陳じ、以て南方の擧兵は必ず不利と為し、曰く、

「今茲害氣は揚州に在り、一也。庚午は自ら刑し、先ず發する者傷つく、二也。日食(前年十一月朔、日は星紀の分に食す)して晝晦く、宿は斗、牛に値す、三也。熒惑(火星、罰星なり)は翼、軫(楚、荊州の方向)に伏し、主は亂及び喪を主る(居る所の宿の国は欠を受け死喪寇乱す)、四也。太白(木星、兵の象)は未だ出ず、兵を進む者は敗れる、五也。夫れ興國之君は、先ず人事を修め、次いで地の利を盡し、後に天の時を觀、故に萬舉し萬全なり。今**劉義隆**是新造之國にして、人事は未だ洽かならず。災變は屢々見られ、天の時は協せず。舟行して水は涸れ、地の利は盡さず。三つの者は一の可も無く、而して**義隆**は之を行わんとす、必ず敗れるは疑い無し。」

魏主は衆言に違ふ能わず、乃ち詔して冀、定、相(魏の道武帝は天興四年に相州を鄴に置く)の三州に船三千艘を造り、幽州以南の戍兵を簡びて河上に集まらしめ以て之に備える。

西秦秦の乞伏什寅の母の弟の前將軍の**白養**、鎮衛將軍の**去列**は、什寅之死せるを以て、怨み言有り、秦王の**暮末**は皆な之を殺す。

●**夏、四月**，甲子（8日），**魏主**は雲中に如く。

●敕勒の萬餘落は復た叛して走り、**魏主**は尚書の**封鐵**をして追い討た使め、之を滅ぼす。

■**六月**，己卯（24日），氏王の**楊難當**を以て冠軍將軍、秦州刺史、武都王と為す。

●**魏主**は平南大將軍、丹楊王の**太毘**をして、河上に屯せ使め、**司馬楚之**を以て安南大將軍、荊州刺史と為し、琅邪王に封じ、潁川に頓せしめ以て宋に備える。

吐谷渾吐谷渾王の**慕琬**は其の衆萬八千を將して秦の定連を襲い、秦の輔國大將軍の**段暉**等は撃ちて之を走らす。

■**到彦之**は淮より泗に入り、水は滲み(下流する)、日に行きて才(續は纔)に十里、四月より**秋七月**に至り、(7-227p) 始めて須昌(山東省東臨道東平県の西、現・泰安市東平県)に至る。乃ち河を溯りて西上す。

●**〔魏は河南四鎮の撤退作戰を取る〕****魏主**は河南の四鎮(洛陽の金墉、虎牢、滑臺、碣磬)の兵少なきを以て、諸軍に命じて悉く衆を収めて北に渡らしむ。戊子（4日）、魏の碣磬の戍兵は城を棄てて去る。戊戌（14日）、滑臺の戍兵も亦た去る。庚子（16日）、**魏主**は大鴻臚の陽平公の**杜超**を以て都督冀、定、相三州諸軍事、太宰と為し、爵を陽平王に進め、鄴に鎮し、諸軍の節度を為さしむ。**超**は、**密太后**之兄也。庚戌

(26日)、魏の洛陽、虎牢の戍兵は皆な城を棄てて去る。

■ **〔河南の四鎮への宋の進駐〕** 到彦之は朱修之を留めて滑台を守らしめ、尹冲をして虎牢を守らしめ、建武將軍の杜驥をして金墉(洛陽)を守らしめる。驥は、預(杜預は晉初に呉を平らげるの功あり)之玄孫也。諸軍は進みて靈昌津に頓し、列んで南岸を守り、潼關に至る。是に於いて、司(州)袞(州)は既に平らぎ、諸軍は皆な喜び、王仲德は獨り憂色有り、曰く、

「諸賢は北土の情偽を諳んじず、必ず其の計に墮ちん。胡虜は仁義は不足すると雖も、而して凶狡にして餘り有り、今戍を斂めて北に歸るは、必ず力を並せて完聚する。若し河氷が既に合せば、將に復た南に來たらんとする、豈に以て憂いと為さざる可けん乎！」

■ 甲寅(30日)、林邑王の范陽の邁は遣使して入貢し、自ら陳ず

「交州と睦まず、乞いて怨宥を蒙らん。」(林邑は范奴文以來度々、交州と交戦す)

● **〔魏の迎撃態勢〕** 八月、魏主は冠軍將軍の安頡を遣わして諸軍を督護し、到彦之を撃たしむ。丙寅(12日)、彦之は裨將の吳興の姚聳夫を遣わして河を渡り治板を攻め、頡と戦わしむ。聳夫の兵は敗れ、死者は甚だ衆なり。戊寅(24日)、魏主は征西大將軍の長孫道生を遣わして丹陽王の太毘に會し河上に屯し以て彦之を御がしむ。

▲ **〔燕の太祖の殂と混乱、弘の即位〕** 燕の太祖は疾に寝ね、中書監の申秀、侍中の陽哲を内殿に召し、後の事を以て屬す。九月、病は甚しく、輦し而して軒に臨み、太子の翼に命じて國事を攝し、兵を勒して政を聽き、以て非常に備えしむ。

▲ 宋夫人は其の子の受居を立てるを欲し、翼の政を聽くを惡み、翼に謂って曰く、

「上の疾は將に瘳えんとす、奈何して遽に父に代わりて天下に臨まんと欲する乎！」

翼の性は仁弱にして、遂に東宮に還る、日に三たび往きて疾を省す。宋夫人は矯詔して内外を絶ち、閹寺(朝夕門戸の開閉を司る宦官)を遣わして傳聞せしめ而して已み、翼及び諸子、大臣は並びて見るを得ず、唯だ中給事の胡福は獨り出入りするを得、専ら禁衛を掌る。福は宋夫人が遂に其の謀を成すを慮って、乃ち司徒、錄尚書事、中山公の弘(馮跋の少弟、字は文通)に言い、弘は壯士數十人と甲を被って禁中に入り、宿衛は皆な戦わずして而して散る。宋夫人は命じて東閣を閉ざしめ、弘の家僮の庫斗頭は勁捷にて勇力有り、閣を逾えて而して入り、皇堂に至り、女御(侍女)一人を射殺す。太祖は驚懼し而して殂す。弘は遂に天王に即位し、人を遣わして城を巡って告げて曰わしむ：

「天は凶禍を降し、大行は崩背し、太子は疾に侍せず、群公は喪に奔らず、(7-228p)疑うに逆謀有らん、社稷は將は危うからんとする。吾は介弟之親に備わり、遂に大位を攝して以て國家を寧んず、百官の門を叩いて入る者は、陛(階級)二等を進むべし。」

太子の翼は東宮の兵を帥いて出でて戦い而して敗れ、兵は皆な潰れ去り、弘は使を遣わして翼に死を賜る。太祖には子百餘人有り、弘は皆な之を殺す。太祖に諡して文成皇帝とし、長谷陵に(続により補充)葬す。

■ **〔夏と宋の挾撃策〕** 己丑(6日)、夏主は其の弟の謂以代を遣わして魏の鄜城(陝西省榆林道鄜県、現・延安市富県)を伐たしめ、魏の平西將軍の始平公の隗歸等は之を撃ち、萬餘人を殺し、謂以代は遁げ去る。夏主は自ら數萬人を將して隗歸を鄜城の東に邀撃し、其の弟の上谷公の社干、廣陽公の度洛孤を留めて平涼を守らしめ、(宋に)遣使して來たりて和を求め、兵を合わせて魏を滅ぼし、遙かに河北を分け、恆山よ

り以東は宋に屬し、以西を夏に屬すを約す。

● **〔崔浩の夏を先ず攻略する策〕** 魏主は之を聞き、兵を治め、將に夏を伐たんとし、群臣は鹹な曰く、「劉義隆の兵は猶ほ河中（流）に在り、之を捨てて西に行けば、前寇は未だ必ずしも克つ可からざるに、而して義隆が虚に乗りて河を濟れば、則ち山東（太行恆山以東）を失う矣。」

魏主は以て崔浩に問い、對えて曰く、

「義隆と赫連定は遙かに相い招き引き、虚聲を以て唱和し、共に大國を窺い、義隆は定の進むを望み、定は義隆の前^{すす}むを待ち、皆な敢えて先に入る莫し。譬えば連雞の、俱に飛ぶを得ざるが如く、能く害を為す無き也。臣は始め謂^{おも}うに義隆の軍來たれば、當に河中に屯して止め、兩道より北上し、東道は冀州に向かい、西道は鄴を冲（^つは衝）くべしと、此くの如くならば、則ち陛下は當に自ら之を討ち、徐行するを得ず。今則ち然らず、東西に兵を列ねて二千里に徑^{わた}り、一處に數千に過ぎず、形は分かれて勢いは弱し。此くを以て之を觀るに、傳^{どう}（困弱）兒の情（情勢）は見れ、此くは河を固めて自ら守らんと欲すに過ぎず、北に渡るの意は無き也。赫連定の殘根にして摧^{くじ}（挫）き易く、之を擬^ぎ（計る）せば必ず僕（滅、^はは仆）せん。定に克つ之後、東に潼關を出て、席捲して而して前^{すす}めば、則ち威は南の極に震い、江、淮以北は草の立つ無し矣。聖策は獨り發し（獨創的）、愚近の及ぶ所に非らず、願はくは陛下の疑う勿かれ。」

甲辰（21日）、魏主は統萬に如き、遂に平涼を襲い、衛兵將軍の王斤を以て蒲板に鎮せしむ。斤は、建之子也。

西秦 秦は正月より雨ふらず、**九月**に至り、民の流れ叛する者甚だ衆し。

■ **冬、十月**、竟陵王の義宣を以て南徐州策史と為し、猶（先に石頭に成し、南徐州は京口に治すも、石頭に成す）ほ石頭に成せしむ。

■ 戊午（5日）、錢署を立て、四銖錢を鑄す。

■ **〔金墉城攻防戦〕** 到彦之、王仲德は河に沿いて守を置き、還りて東平（山東省東臨道東平県、現・泰安市東平県）を保つ。乙亥（22日）、魏の安頡^{けつ}（-431、本貫は遼東郡、安同の子）は委粟津（河南省河洛道洛陽県近くの渡津、洛陽市洛竜区）より河を濟り、金墉（洛陽）を攻める。金墉の城は治めざること既に久しく、又た糧食無し。杜驥は棄てて走らんと欲し、罪を獲んを恐る。

■ 初め、高祖の秦を滅ぼすや、其の鐘虓（猛獸形象で飾る懸樂鐘の格架）を江南に遷し、（7-229p）大鐘の洛水に没す有り、帝は姚聳夫をして千五百人を將いて往きて之を取ら使む。驥は之に給^{あざむ}（欺）いて曰く、

「金墉城は已に修は完し、糧食は亦た足り、乏しき所の者は人耳。今虓騎は南に渡らんとし、當に相い與に力を並せて之を御ぐべし。大功は既に立ち、鐘を牽くとも未だ晚^{おそ}からず。」

聳夫は之に従う。既に至り、城の守る可からざるを見、乃ち引いて去り、遂に南に遁げる。丙子（23日）、安頡は洛陽を抜き、將士五千餘人を殺す。杜驥は歸り、帝に言つて曰く：

「本より死を以て固く守らんと欲すも、姚聳夫は城に及んで遽^{にわか}に走り、人情は沮（阻）敗し、復た禁ずを得（^はは可）ず。」

上は大いに怒り、聳夫を壽陽に於いて誅す。聳夫は勇健にして、諸偏裨の及ぶ莫き也。

● **〔魏軍の虎牢攻略〕** 魏の河北の諸軍は七女津（東平の西北）に會する。到彦之は其の南に渡るを恐れ、裨將の王蟠龍を遣わして流れを溯つて其の船を奪わしめ、杜超等は撃ちて之を斬る。安頡は龍驤將軍の陸俟（^はは續では陸侯、北史の陸侯が正しい）と虎牢に進攻し、辛巳（28日）、之を抜く。尹冲及び滎陽太守の清河の崔模は魏に降る。

■**西秦** **〔秦王の暮末の移動〕** 秦王の**暮末**は河西の逼る所と為り、其の臣の**王愷**、**烏訥闐**を遣わして魏に迎えを請い、魏人は平涼、安定を以て之に封じるを許す。**暮末**は乃ち城邑を焚き、寶器を毀て、戸萬五千を帥いて、東に上邽に如く。高田谷（甘肅省渭原道隴西県、現・定西市に渭原県・隴西県あり）に至り、給事黃門侍郎の**郭恆**は（沮渠）**興國**（^{きょうこく}）を**劫**（掠めのろう、^{きやう}）して以て叛せんと謀る。事覺われ、**暮末**は之を殺す。**夏主**は**暮末**の將に至らんとするを聞き、兵を發して之を拒む。**暮末**は留まりて南安を保ち、其の故地（苑川から西平・枹罕は乞伏氏の故地。晉孝武帝太元八年に乞伏國仁は隴西・南安に據る）は皆な吐谷渾に入る。

●**夏** **〔魏主は平涼にて夏主撃破〕** **十一月**（3日）、**魏主**は平涼に至り、夏の上谷公の**社乾**等は城に襲りて固く守る。**魏主**は**赫連昌**をして之を招か使め、下らず、乃ち安西將軍の**古弼**等をして兵を將いて安定に趣か使む。**夏主**は鄜城より安定に還り、步騎二萬を將して北に平涼を救い、**弼**と遇い、**弼**は偽りて退きて以て之を誘う。**夏主**は之を追う、**魏主**は**高車馳**をして之を撃た使め、夏兵は大敗し、斬首は數千級。**夏主**は還りて走り、**鶻觚原**（^{じゅんこげん}甘肅省涇原道靈臺県、現・平涼市靈台县）に登り、方陣を為りて以て自ら固め、魏兵は就いて之を圍む。

■ **〔河北戦線に檀道濟投入〕** 壬辰（10日）、征南大將軍の**檀道濟**に都督征討諸軍事を加え、衆を帥いて魏を伐たしむ。

●甲午（12日）、魏の壽光侯の**叔孫建**、汝陰公の**長孫道生**は河を濟りて而して南す。

● **〔到彦之は空しく撤退す〕** **到彦之**は洛陽、虎牢の守られず、相い繼いで奔り敗れるを聞き、兵を引いて還らんと欲す。殿中將軍の**垣護之**は書を以て之を諫め、以て為す、

「宜しく**竺靈秀**、**朱修之**をして滑台を守ら使め、自ら大軍を帥いて進みて河北に擬すべし」

且つ曰く、

「昔人は連年攻戰して、衆を失い糧乏しきに、猶ほ**膽**（^{たん}胆）を張りて争い前み、肯えて輕々しく退くこと莫き有り。況んや今青州は豐穰にして、濟漕は流通し、士馬は飽逸にて、威力は損する無し。若し空しく滑台を棄て、坐して成業を喪えば、豈に朝廷の任を受（^つ續は授に作るべしと）ける之旨ならん邪！」

彦之は従わず。**護之**は、**苗**（垣苗は邊將なり、宋武帝が長安攻略時に河濟の會に鎮せしめ垣苗城という。三世みな邊將なり）之子也。（7-230p）

■ **彦之**は舟を焚いて歩走せんと欲し、**王仲德**は曰く、

「洛陽は既に陷ち、虎牢の守られざるは、自然之勢也。今虜は我を去ること猶ほ千里、滑台には尚ほ強兵有り、若し遽かに舟を捨てて南に走れば、士卒は必らず散ぜん。當に舟を引いて濟に入り、馬耳谷口（山東省濟南道歷城県、現・濟南市歷城区）に至り、更に宜しき所を詳らかにするべし。」

彦之は先に目疾有り、是に至り大いに動く。且つ將士は疾疫あり、乃ち兵を引いて清（川の名）より濟に入る。南して歷城に至り、舟を焚き甲を棄て、彭城に歩いて趨く。**竺靈秀**は須昌（山東省東臨道東平県、現・泰安市東平県）を棄て、南に湖陸（山東省濟寧道魚臺県、現・濟寧市魚台县）に奔り、青（州）、袞（州）は大いに擾る。**長沙王**の**義欣**は彭城に在り、將佐は魏兵の大いに至るを恐れ、**義欣**に鎮を委てて都に還るを勧め、**義欣**は従わず。

■ **〔蕭承之の強気の防衛作戰〕** 魏兵は濟南を攻め、濟南太守の武進の**蕭承之**（蕭道成の子）は數百人を帥いて之を拒む。魏の衆は大いに集まり、**承之**は兵を偃せて、城門を開か使む。衆は曰く、

「賊は衆にして我は寡なり、奈何して敵を輕じる之甚しき！」

承之は曰く、

「今窮城を懸守し、事は已に危急なり、若し復た弱きを示せば、必ず屠る所と為り、唯だ當に強きを見せて以て之を待つべき耳。」

魏人は伏兵有るを疑い、遂に引いて去る。

●〔夏主大敗、上邽を保つ〕 魏軍は夏主を圍むこと數日、其の水草を斷ち、人馬は飢え渴す。丁酉（15日）、夏主は衆を引いて鶉觚原に下る。魏の武衛將軍の丘眷は之を撃ち、夏の衆は大きく潰え、死者は萬餘人。夏主は重創に中たり、單騎走り、其の餘の衆を收め、驅する民は五萬、西に上邽を保つ。魏人は夏主之弟の丹陽公の烏視拔、武陵公の禿骨及び公侯以下百餘人を獲る。是の日、魏兵は勝ちに乗りて安定に進攻し、夏の東平公の乙斗は城を棄てて長安に奔り、數千家を驅略し、西に上邽に奔る。

●戊戌（16日）、魏の叔孫建は竺靈秀を湖陸に攻め、靈秀は大敗し、死者は五千餘人。建は還りて範城（山東省東臨道范県、現・河南省濮陽市范県）に頓す。

●己亥（17日）、魏主は安定に如く。庚子（18日）、還り、平涼に臨み、塹を掘りて之を圍む。初めて附くものを安慰し、秦、雍之民を赦し、覆（賦役を除く）七年を賜わる。夏の隴西の守將は魏に降る。

●辛丑（19日）、魏の安頡は諸軍を督して滑台を攻める。

●〔魏主は河西王の使者に崔浩を自慢〕 河西王の蒙遜は尚書郎の宗舒等を遣わして魏に入貢せしめ、魏主は之と宴し、崔浩之手を執りて以て舒等に示して曰く、

「汝が聞く所の崔公は、此くは則ち是れ也。才略之美は、今比べる無し。朕の動止は之に咨り、^{あらかじ}豫め成敗を陳じ、符契を合わすが若く、未だ嘗て失わざる也。」

●魏は叔孫建を以て冀、青（魏はまだ青州を治めず）等四州諸軍事を都督せしむ。

●魏の尚書の庫結（北の庫辱官氏は庫氏を名乗る、辱は人偏付）は騎五千を帥いて秦王の暮末を迎える。秦の衛將軍の吉毘は以為らく、

「宜しく内に従るべからず」

暮末は之に従わず、庫結は引いて還る。（続は南安に帰るとする。）

西秦 〔暮末と楊難當の連携〕 南安の諸羌の萬餘人は秦に叛し、安南將軍、督八郡諸軍事、廣寧（隴西の郭県に治す、甘肅省蘭山道隴西県現・定西市隴西県）太守の焦遺を推して主と為し、遺は従わず、乃ち遺の族子の長城護軍の亮を^{おびや}劫かして主と為し、(7-231p) 衆を帥いて南安を攻める。暮末は氐王の楊難當に救いを請い、難當は將軍の苻獻を遣わして騎三千を帥いて之を救わしめ、暮末は之と合して諸羌を撃つ。諸羌は潰え、亮は奔りて廣寧に還り、暮末は進軍して之を攻め、手ずから令を以て焦に與え亮を取ら使む。**十二月** 遺は亮の首を斬りて出で降り、暮末は遺の號を進めて鎮國將軍とす。秦の略陽（晉の武帝が天水を分けて置いた郡）太守の弘農の楊顯は郡を以て夏に降る。

■ 〔豫州刺史の義欣の善政〕 辛酉（9日）、長沙王の義欣を以て豫州刺史と為し、壽陽に鎮せしむ。壽陽の土は荒れ民は散り、城郭は頽敗し、盜賊は公行す。義欣は宜しきに隨いて經理し、境内は業に安んじ、道に遺ちたるを拾わず、城府は完實し、遂に盛籓と為る。^{じやくは}芍陂（中国最古の巨大水利施設、安徽省寿县）久しく廢す、義欣は堤防を修治し、河水（肥河の水）を引いて陂に入れ、田の萬餘頃に溉ぎ、復た旱災無し。

● 〔平涼陥落〕 丁卯（15日）、夏の上谷公の杜干、廣陽公の度洛孤は出で降り、魏は平涼に克つ。

●關中侯の豆代田は奚斤、娥清等を得、魏主に獻ず。魏主は夏主之后を以て代田に賜り、斤に命じて膝行

して酒を執り以て代田に奉じせめ、斤に謂って曰く、
「汝の生を全くする者は、代田也。」

代田に爵井陘侯（曹魏以来邑の無い關中侯から邑のある井陘侯に爵す）を賜り、散騎常侍、右衛將軍を加え、内都幢將（百人を幢とする帥は柔然の法、魏の幢將は三郎衛士の禁中直宿者を司る）を領せしむ。

●【關中は悉く北魏に帰す】夏の長安、臨晉、武功の守將は皆な走り、關中は悉く魏に入る。魏主は巴東公の延普を留めて安定に鎮せしめ、鎮西將軍の王斤を以て長安に鎮せしむ。壬申（20日）、魏主は東に還り、奚斤を以て宰士（膳飲を掌る役、辱めるため）と為し、酒食を負いて以て従わ使む。

●王斤は驕矜にして不法、左右を信用し、百姓を調役し、民は命に堪えず、南に漢川に奔る者は數千家あり。魏主は治を案じて實を得、斤を斬りて以て^{とな}徇える。

■【到彦之らは敗戦の責任で下獄免官】右將軍の到彦之、安北將軍の王仲德は皆な獄に下されて免官し、袁州刺史の竺靈秀は軍を棄てるに坐して伏して誅す。上は垣護之の書を見て而して之を善とし、以て北高平（兗州の郡、湖陸に治す、山東省濟寧道魚臺県、現・濟寧市魚台县）太守と為す。

■【府藏、武庫は敗戦で尽きる】彦之之北伐する也、甲兵資實は甚だ盛んなり。敗れて還るに及びて、委棄蕩盡し、府藏、武庫は之が為に空虛となる。它日、上は群臣と宴し、荒外（南北分治後各々封域外をいう）の降人有りて坐に在り。上は尚書庫部（曹操の置く二十三部の一、戎器・鹵簿・儀仗を掌る）郎の^{こちん}顧琛に問う、
「庫中の仗は猶ほ幾く許り有るや？」

琛は詭りて對える、

「十萬人の仗有り。」

上は既に問いて而して之を悔やみ、琛の對えを得、甚だ喜ぶ。琛は、和（顧和、90卷晉元帝大興元年に見える）之曾孫也。

■【王弘の文武之半を義康に割く】彭城王の義康は王弘と並びて尚書を録し、義康の意は猶ほ快快たり、揚州を得んと欲し、辭旨を^{あらわ}形にす。弘の弟の曇首が中に居り、上の親しく委ねる所と為るを以て、愈々悦ばず。弘は老病を以て、屢々骸骨を乞い、曇首は自ら吳郡を求め、上は皆な許さず。義康は人に謂って曰く、（7-233p）

「王公は久しく病して起たず、神州は^{なん}詎ぞ宜しく臥して治めるべけんや！」

曇首は弘に

「府中の文武之半を減じて以て義康に授けよ」

と勸め、上は二千人を割くを^{ゆる}聽し、義康は乃ち悦ぶ。

令和2年3月1日	翻訳開始	10827 文字
令和2年3月5日	翻訳終了	18370 文字
令和2年9月2日	完訳終了	21362 文字
令和3年7月24日	書下し終了	22061 文字